

## 2.2 コメンテーター 2

---



加國尚志

(立命館大学国際平和ミュージアム副館長・立命館大学文学部教授)

ご紹介にあずかりました国際平和ミュージアム副館長の加國です。今回のシンポジウムは、私達の活動においても非常に有意義なシンポジウムであるという風を感じております。

簡単に自己紹介をさせていただきますと、私の専門は哲学でして、人間を身体から考えることをテーマにしたメルロ＝ポンティというフランスの哲学者を研究しております。それから私がこの大学の研究グループで行っております「暴力からの人間存在の回復」という研究プロジェクトがありまして、人文学、とりわけ芸術や民衆文化の観点から、人間が暴力から回復する方法を模索するという研究を行っています。例えば文学部にウェルズ恵子先生という方がいらっしゃるのですが、この方は黒人音楽、ブルースやスピリチュアルといった、長い間差別や暴力に耐えてきた人たちの文化の中に人間存在の回復の可能性を見出すという研究をされています。

国際平和ミュージアムは、1992年にオープンをいたしまして、今年で20年目。累計の入館者数がもうすぐ80万人というミュージアムでして、年間約5万人が訪れております。そのうちの3万人が修学旅行生ということで、立命館大学の中で社会教育を担う部門、特に社会への平和教育を担う部門として重要な役割を果たしております。

是非展示もご覧いただきたいのですが、地階では15年戦争に始まる、日本が加担した戦争の歴史を展示しております。それから2階では現在の国際的な紛争、飢餓、貧困、難民、その他の暴力の問題などを扱っています。生徒や学生たちに戦争の記憶を伝え、それから現代の世界にある暴力の多くの問題を知ってもらって、そこから解決のために自分にはどういう学習や研究ができるかを

考えてもらう施設です。

昨年は、特別展としてプリーモ・レーヴィという、アウシュビッツから奇跡的に生還したユダヤ系イタリア人作家の回顧展をこの中野記念ホールで行いまして、社会的に大変高い評価を受けました。

このミュージアムの特徴は、日本の加害責任を伝えるということの一つのテーマに盛り込んでいる点です。地下の展示では、日本が植民地を侵略し、抑圧・暴力を及ぼしたということを表示しております。

私どもも課題を抱えております。展示の内容として戦争の悲惨さ、恐ろしさを伝えなければならないということで、残酷な写真等も展示しています。日本軍に殺された子どもの死体や、ベトナム戦争の時に粉々になった遺体などの写真を展示しています。これには賛否両論ありまして、それぐらい恐ろしいものを見せなければ、戦争の恐ろしさは実感できないという意見を持つ方もいらっしゃいます。他方、そういったものは展示しない方がいいのではないかという意見もあります。一例として修学旅行で見に来た中学生が、写真にショックを受けてお腹が痛くなったと言ったことがありました。それぐらい強烈なショックを与えてしまう面を持っています。戦争の悲惨さをしっかり伝えなくてはいけませんし、記憶にとどめてもらわなければいけないのですが、同時にトラウマを反覆、増幅する危険と背中合わせです。これがうまく解消されませんと、嫌悪感や場合によっては憎悪、場合によっては報復感情のようなものを増幅させる危険があります。

例えばベトナム戦争のそういう写真を見て、アメリカという国家に対して怒りを持つというのは正当かと思うのですが、そこからアメリカ人は嫌いだというような差別感情に行きつくのは、私達の狙うところではありません。ここは、ピースミュージアムなのであって、ヘイトミュージアムになってはいけません。また、日本が戦争でどのような加害を犯したかということを表示していますが、そうしますと自分たちの祖父の世代はこんなことをやったのかという一種の憎悪につながる可能性もありますし、自責の念が強くなりすぎる場合も出てきます。これがあまり強くなりすぎますと、心理学的に、否認という、わかっているけれども認めないという態度として現れてくる場合もあります。

こういうことをどうやって乗り越えたらいいのかということも、このミュー

ジアムの一つの課題であります。例えばミュージアムを案内して解説して下さるボランティアガイドという方々がいらっしゃいます。多くの方が戦争経験者です。空襲や軍事教練を経験した方々が戦争体験を子ども達に語って下さっています。戦争体験を語ることで、悲惨な経験がその方のライフヒストリーに統合されていくという、そういう光景を子どもたちが見ることによって、憎しみや差別感や報復感情に結びつかずに展示をとらえることができるかもしれません。ジュディス・ハーマンという心理学者が『心的外傷と回復』という本で、戦争体験の語りとライフヒストリーへの統合ということを述べていますが、他方で、例えばベトナム戦争の時に、戦争体験を語ることを政府が抑圧した、これがベトナム帰還兵たちの二次的トラウマになったということを彼女は報告しています。

トラウマを共有するということが、トラウマからの回復になる可能性がある一方で、それを共有させないということ、二次的なトラウマになる可能性がある。それから、語るということはとても苦しい作業です。ある70代後半のガイドさんは、やっぱり50代ぐらいの時には人には語れなかった、とおっしゃっていました。空襲を受けて周囲の人たちが死んだという悲惨な経験は、やっと70歳、80歳になって初めて子ども達に話せるようになったのだそうです。

今日、ボルカス先生も、ホロコーストのサバイバーの2世であるとおっしゃいましたが、最近、日本で翻訳されましたエヴァ・ホフマンの『記憶を和解のために』(“After Such Knowledge, A Meditation on the Aftermath of the Holocaust”)という本がありまして、そこで彼女は記憶に対する芸術や文学の役割を強調しています。恐ろしい記憶をどういう風に伝えていくか、どういう風に知らせるか、どういう風に記録していくかというところで芸術や文学は大きな役割を果たしてきた。

ただし、文学者たちも先ほど申しましたプリーモ・レーヴィなどは最後には自殺してしまいました。芸術という形で極限の悲惨な体験を伝えることによって、その人たちは癒されたと私たちは思いたいけれども、やはり癒し切れなかったという苦い思いが残る結果になっています。それは、記憶や証言というものが他者の死、他者の苦痛というものに関わるもので、証言している人は生き残っているわけですから、同一化や感情移入によって解決しないものがやは

り残るということです。そのプリーモ・レーヴィ展の時に徐京植先生に講演に来ていただいたのですが、プリーモ・レーヴィの行ったことは「証言不可能なことを証言する」ということだったとおっしゃいました。

これは私どもミュージアムにとっても非常に重要な課題です。証言できないものをどう証言していくか。伝えることができないものをどう伝えるかという非常に重い課題です。私どものミュージアムも、最終的には見に来た子どもたちが和解のためには何ができるだろう、どうしたら人間は許しあえるようになるのだろうと考えて欲しい。その答えは誰にもわからないと思います。今日のボルカス先生のお話にもありましたが、和解や許しは難しい長いプロセスを経て、突然起こるもので、こうすればこう和解が成立するというような都合の良いマニュアルのようなものはないのでしょうか。しかし、ミュージアムとしてはその契機をどこかに組み込んでおきたいとは思っています。見に来た子どもたちが嫌悪感や不安を抱えて出ていくのではなくて、やはり人間は和解しなくてはいけないと思って出ていってくれるような仕組みです。その点で、今日の村本先生初め、皆様のご発表から多くのヒントをいただきました。そのエヴァ・ホフマンの本の最後のところに出てくる部分を読みたいと思います。

「私（エヴァ・ホフマン）は、アメリカ合衆国のホロコースト博物館で不思議な啓示の瞬間を感じたことがある。陰鬱な博物館の展示物を通り抜け、その地獄絵の世界に一種のなじみ深さを感じながら入り込んでいったとき、突如として或る思いが私の心に閃いた。この世界の外側に、何か別の世界があるはずだ、と。単に恐怖というだけではない何かの現実、恐怖と同様にとっても根本的なものが。」（エヴァ・ホフマン『記憶を和解のために』 早川敦子訳 みすず書房 2011年291頁）

この言葉はこの本の最後に出てきます。私達は特に地下の展示で人間が行ってきた最も残酷な行為の展示を行っています。2階は現代の世界の、この日本では考えられないような貧困や暴力を展示しています。しかし、世界はこういうものだという、その認識ももちろん大事なのですが、それだけで終わってほしくはないのです。この世界の外側に何か別の世界がある、と思ってもらいたい。この世界の外側に何か別の世界があるはずだという、この感覚をどうやって生み出すことができるのでしょうか。エヴァ・ホフマンはとても

うまく言っていますけれども、恐怖と同様にとても根本的、ということであって、恐怖が全くないパラダイスを夢見てくださいということではない。恐怖と同じく根本的、でも別の世界。今日の村本先生、張先生、ボルカス先生、そして紫金草合唱団の素晴らしい演奏を聴いておまして、和解や許しというのは簡単にプログラムできるものではないけれども、やはり私達はどこかでトラウマ的な記憶を乗り越えて行こうとしなければいけないのではないかと思います。戦争を展示するミュージアムはトラウマを与えて (give) います。戦争の悲惨さを隠してきれいごとにするわけにはいきません。しかし、そこで終わるのではなくて、新しい他者、特に被害者との関係の中で世界を新しく見つめ直して、そこからある許すこと、to forgive あるいは forgiveness へと至る道を考える、そういう平和教育の施設にこのミュージアムがなれたら、と今日のお話を聞いていて思いました。ですので、私どもとしましても、特に芸術やアートの潜在的な力を借りて、今日の村本先生の平和教育プログラム開発と今後も協働関係を結びたいと考えております。どうもありがとうございました。

---

加國尚志（立命館大学文学部教授 哲学）

立命館大学国際平和ミュージアム副館長。立命館大学人文科学研究所研究プロジェクト「暴力からの人間存在の回復」代表。メルロ＝ポンティの哲学を中心としたフランス現代哲学の研究を行っている。